

詠歌一体（広本）の諸本と成立（上）

佐藤恒雄

一 はじめに

「詠歌一体」（広本）の諸本とその分類については、これまでに考察したり解説したりする機会が何度かあった。^①しかし、最近の研究の進展に伴い再考してみると、従前の拙論は大きな錯誤を含んでいたことに思い至る。その一つは二条家系統為氏奥書本（天理図書館蔵本）の位置づけの問題であり、二つは冷泉家系統為相本（秋田大学蔵本）の位置づけに関する問題である。

再考を促された直接のきっかけは、近年、小林一彦氏によつて、秋田大学本は外題を含め全冊為秀の書写になる写本で、書写年次は奥書にいう建武三年を含めたそれ以降の南北朝初期と推定する新説を提示されたことにある。^②すなわち従前の理解では、冷泉家系統本を、奥書の指示するところに従つて、

第一類（為相本）

秋田大学蔵『詠歌一体』（桑門某写、為秀外題）

第二類（為秀本）

河野美術館蔵『詠歌一体』（為秀筆）ほか四種

と分類して記述してきたのであったが、書写者と書写年次について的小林氏の新しい見解は、虚心に検討してみると全く正当で、異論の余地はないと判断される。秋田大学本は、為秀筆本の一本として位置づけ直されねばならない。小林氏は、なお為相筆本の存在や、為家自筆本の存在までを否定してはおらず、その点で不徹底の謬りを免れないと考える。稿者は、奥書中にいう「嘉元之比」「柏木枯株」為相の筆になる本というのは、實在しなかつたし、完全なる自著を自筆で書記した為家自筆本というのかなり疑わしいと考えている。

再考し考究を続ける過程で浮上してきたのが、第一の為

氏奥書本の位置づけの問題であった。奥書識語ならびに本文の大きな異同箇所からする判断と、加えて二条・冷泉両家の関係を極めて閉鎖的に考えてきたことの不当さが炙り出されてきたのである。二条家系統為氏本の本文は、冷泉家系統為秀本（冷泉家の家の証本）の形成に、抜きがたく極めて密接に関わっていると見なければならぬ。

それらの問題の大概を説き明かすために、本稿ではまず最も基礎的なことがらに属する「詠歌一体」（広本）の諸本を博搜し、分類整理して一覧することから始めたい。

二 諸 本 分 類

これまでに調査しえた詠歌一体（広本）の諸本を、「奥書」ならびに「本文内容」の特徴を基準に、分類して一覧すると、以下のとおりとなる。

二条家系統本

第一類①天理図書館蔵（九一・二・四九五）『詠歌一体』（為氏奥書本）↓『日本歌学大系第三卷』所収

②宮内庁書陵部蔵（鷹・四八九）『詠歌一体』（為氏奥書本）（「和歌聞書」と合綴）

第二類③北海道大学附属図書館蔵（L・一一〇七・TA）

『三賢秘訣』（錯簡アリ）

④宮内庁書陵部蔵（二一〇・六九八）『三賢秘訣』（同）

⑤大和文華館蔵（三・三九六八）『三賢秘訣』（同）

⑥今治市河野美術館蔵（三三二・六四七）『三賢秘訣』（同）

第三類⑦天理図書館蔵（九一・二・七二二）『八雲口伝』（奥書ナシ）。「詠歌大概」「和歌口伝（近代秀歌）」「下官集（抄出）」などを後付

⑧島根大学附属図書館蔵（九一・一〇四・Y一六）桑原文庫『八雲口伝』（奥書ナシ）。「詠歌大概」を後付

第四類一種

⑨尊経閣文庫蔵（一二・二書）『八雲口伝』
号詠歌一体
二種

⑩篠山市立図書館蔵青山文庫（二六二）『八雲口伝』
号詠歌一体（奥書ナシ）

第五類⑪九州大学附属図書館蔵細川文庫「和歌六部抄」（四七・五四三・ワ・三七）の内「八雲口伝号詠歌一体」（三重県立図書館「和歌六部抄」、祐徳文庫「和歌六部抄」他も）

⑫宮内庁書陵部蔵「和歌部類抄」(三三三・一〇一)

の内『八雲口伝』号詠歌一体(立教大学附属図書館

「和歌秘書部類」大洲市立図書館「和歌秘抄部類」

他も)

⑬天理図書館蔵「和歌秘抄」(九一・二・六三五)

の内『八雲口伝』号詠歌一体(熊本大学附属図書館北

岡文庫「和歌秘抄」、東京大学国文研究室「和歌

秘抄」、国文学研究資料館蔵久松本「和歌秘伝抄」

他も)

⑭宮内庁書陵部蔵(二六六・三九〇)『八雲口伝』

号詠歌一体

⑮宮内庁書陵部蔵(二六六・二四九)『八雲口伝』

号詠歌一体

⑯元禄九年八月刊本『八雲口伝』号詠歌一体

⑰刊本「和歌六部抄」の内『八雲口伝』号詠歌一体

⑱元禄十五壬午孟春日刊本「和歌古語深秘抄」の内

『八雲口伝』号詠歌一体

第六類⑲歴史民族博物館蔵高松宮本『八雲口伝』号詠歌一体

冷泉家系統本

第一類「散位為秀」(「左少将藤原為秀」加証識語)筆本。

(1330 以前書写)

②1今治市河野美術館蔵(一二五・六五一)『和哥一

体』(為秀筆)

②②蓬左文庫蔵(一〇七・一)『為秀歌話』

第二類「右近權中将為秀」筆本。(1347-1356 間書写)

②③冷泉家時雨亭文庫蔵『詠歌一体』(為秀筆)

②④筑波大学附属図書館蔵(ル二〇五・一〇五)『詠歌

一体』

②⑤国立公文書館内閣文庫蔵(古一七・三三五)『歌道

之書』

②⑥三手文庫蔵(歌・久)『詠歌一体』

②⑦北海学園大学蔵北鶴文庫(文・一七五)『八雲口

伝』

②⑧架蔵『和歌一体』

②⑨天理図書館蔵(九一・二・タ五)『詠歌一体』↓

岩波文庫『中世歌論集』所収

③⑩篠山市立図書館蔵青山文庫(二四九)『和歌一体』

「羽林枯株」為秀筆本。(1336 直前ころ書写)(為

秀筆本ハ現存セズ)

③⑪徳川美術館蔵(歌書二・四)『和歌秘抄』(了俊筆)

↓『歌論集一』所収

③蓬左文庫藏（一・九二）『為家卿和歌之書』

第四類 「参議兼侍從藤原為秀」筆本。（1360-1362 問書

写）（為秀筆本ハ現存セズ）

③松浦家旧藏『詠歌一体』（所在不明。為秀筆奥書写
真ノミ史料編纂所蔵）

③大谷大学附属図書館蔵片仮名本『和歌一体』（不
明除籍本。現存セズ）

③島原市図書館松平文庫蔵（一一七・六三）『詠歌一
体』（貞治四年五月二十六日）某書写奥書）

③陽明文庫蔵（近・一四二・一七）『詠歌一体』（為
秀奥書ナク、貞治四年五月二十六日奥書以下）

③蘆庵文庫蔵（三三・四一）『詠歌一体』（為秀奥書
ナク、貞治四年五月二十六日奥書のみ）

③高城功夫氏蔵（「古今集名所」「和歌秘々」合綴）
『詠歌一体』（為秀奥書ナク、貞治四年五月二十四

日奥書のみ）

③尊経閣文庫蔵（九六・古）『詠歌一体』（為秀奥書
ナク、貞治四年五月二十四日奥書以下）

④天理図書館蔵（九一一・二・六五七）『為家卿和歌
用意』（為秀奥書・貞治奥書ナク、正保三年書写

奥書ノミ）

第五類 「建武丙子歲沽洗十九日桑門」（実ハ為秀）筆本。

（1366-1368 問書写カ）

④秋田大学附属図書館蔵（九一一・二五・Ta八

一）『詠歌一体』（嘉元頃の為相筆本を建武三年桑
門某書写と偽装）

第六類 「権中納言為秀」筆本。（1366-1368 問書写）（為秀
筆本ハ現存セズ）

④久保田淳氏蔵「新三十六人自讃歌」合綴無題本

④宮城県立図書館蔵伊達文庫（伊九一一・二〇七・
四）『詠歌一体』

④天理図書館蔵吉田文庫（八一・吉一六四）無題本
（為家卿和歌口伝）

④立教大学附属図書館蔵（八九五・六一〇四・F九
六）『詠歌一体』

④国立国会図書館蔵（九一一・一〇一・四）『詠歌一
体初学抄（「後鳥羽院消息」合綴本）

④冷泉家時雨亭文庫蔵『為秀御詞口伝抄』（錯簡アリ。
末尾部欠逸）

④冷泉家時雨亭文庫蔵『詠歌一体』（明応八年為広
筆。「自讃歌」他と合綴）（為氏奥書本）（冷泉家系

統本と混態）

三 本文の主要異同箇所と諸本におけるあり様

右の分類の基準とした「本文」の主要異同箇所を掲示すると、以下のとおりである。

①冒頭

- ・和歌を詠することかならずしも才学によらずた、心よりおこる事と申たれと ○
- ・歌を詠する事必しも才学によらず只心より起る事と申たれと(も) △
- ・歌を詠する事必しも才学によらずた、心よりおこるごと、申たれとも ▽
- ・和歌を詠事かならず才学によらずた、心よりおこれる事と申たれと ×

②冒頭続き

- ・あるへきすちをよくよく心えて歌ことにおもふところをよむへきなり ○
- ・あるへきすちをよくよく心得入れて歌ことにおもふところをよむへきなり ◎
- ・あるへきすちをよくよく心得て(歌を)よむへきなり △
- ・あるへきやうをよくよく心得て歌をはよむへし ▽

- ・あるへきをよくよく心得て歌をはよむへき事なり ×

③落題

- ・詞(の)字の題をは ○
- ・詞の字のあらはれたる題をは ×

④「等」思兩人恋」の例歌

- ・思兩人恋 かつ方もよかれんことのかなしきにふたつにわくる我身ともかな ○
- ・等思兩人恋 津の国の生田の川に鳥もゐは身をかきりとや思ひなりなん ×
- ・等思兩人恋 かつ方もよかれんことのかなしきにふたつにわくる我身ともかな(二行分ち書き一首を見せ消ちとし右中央に「本マ」、左下半に「是は平懷にみくるしき也」、行間に次の一首を小字書入れ「つのくにのいくたのかはに鳥もゐは身をかきりとや思ひなりなん」 △
- ・等思兩人(恋) かつ方もよかれんことのかなしきにふたつにわくる我身ともかな
- 是は平懷にみくるしき也
- 津の国の生田の川に鳥もゐは身をかきりとや思ひ成なん ▽
- ・等思兩人恋 かつ方もよかれんことのかなしきにふたつにわくる我身ともかな

津の国の生田の河に鳥もゐは身をかきりとや思なりなん

◎

⑤ 難題

・ 難題をはいかやうにもよみつつけむために本歌にすかりてよむ事もあり

○

・ 難題をはいかやうにも本歌にすかりてよむ事もあり

×

⑥ 難題

・ か様の事は更々によむへからす

○

・ か様の事はこのみよむへからす

△

・ か様の事眼前ならすは(更々)よむへからす

×

・ か様の事は眼前ならすは(さ)のみ詠すへからす

+

⑦ 花の題に

・ 月(の題)に暁月をよ(ま)む事あるへからす

○

・ 月の題に暁の月をよまむ事歌合にはあるへからす

△

・ 月の題に暁月をよむ事歌合にはしかるへからす

×

⑧ 異名

・ されはと夜半の夏虫ともよみ、思ひにもゆるかけなとよむなり(へし)

○

・ されは夜半の夏虫ともよみ、もゆるかけなとよむへし△

△

・ されは夜半の夏虫とも、思ひにもゆるなとよむなり、た

た

たはたるとよむへきにこそ

×

⑨ 「近代よき歌と申合ひたる歌とも」の例歌四首目

・ 旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さひしき山のかけはし○

・ 一首ナシ

×

⑩

・ それを難してうきかせはつくもうき雲はつ風にてこそあるへきをなとよみたかる

○

・ それを難してうきかせはつくもうき雲はつ風にてこそあるへきをか様によみたかる

◎

・ それを難してうき風はつ雲なとよみたかるよし

×

⑪ 「かさね詞の事」例歌一首目

・ けふかともあすともしらぬ白菊のしらすいくよをふへき我身そ

○

・ けふかともあすともしらぬ白菊のしらす我身はいくよふへきそ

△

・ 一首ナシ

×

⑫

・ あはれその人の歌よとおほえて風情なきやうにもみゆ人に例のことといはるるも

○

・ あはれ其人の歌よとおほえて風情なき様にもみえ人に例の事といはるるも

○

・ あはその人の歌とおほえて風情のなき様にもみゆ人に例

○

	五類 ㊦本	六類 ㊧本
㊦本	×	×
㊧本	○	○
㊨本	○	○
㊩本	○	○
㊪本	○	○
㊫本	○	○
㊬本	○	○
㊭本	○	○
㊮本	○	○
㊯本	○	○
㊰本	○	○
㊱本	○	○
㊲本	○	○
㊳本	○	○
㊴本	○	○
㊵本	○	○
㊶本	○	○
㊷本	○	○
㊸本	○	○
㊹本	○	○
㊺本	○	○
㊻本	○	○
㊼本	○	○
㊽本	○	○
㊾本	○	○
㊿本	○	○

*1「月につるふ」〔色なる波に〕無。
 *2「われても未だ」〔身を枯の〕〔袖さへ波の〕無。
 *3「われても未だ」〔身を枯の〕〔袖さへ波の〕無。
 *4「雪の下木」有。
 *5「月につるふ」無。
 *6「渡ればにこる」無。
 *7「我のみけたぬ」無。

四 二条家系統本から流布板本へ

二条家系統本、第一類の①為氏本は、次の奥書をもつ。

本云

如此不審猶臨其座出来、随思出追可注付、是不可有外見、家中僻案所存也、志同者可随之歟、

建治二年十一月十一日 四代撰者 前重相

わかものうらのなみのたよりのもしほくさかきをくあとを
あはれともみよ

建治二年（一二七六）七月に龜山院の院宣を受けて、『統拾遺和歌集』の撰集を開始したばかりのころに書き付けた、為氏の識語である。写しは室町後期ころか。為氏は、この歌論が父為家の著作であるとは言っておらず、其の座に臨んで出来した不審を思い出すに従って注付した「家中僻案所存也」と断言し、書き添えられた和歌の内容からみても、

為氏自身の著述であることを主張していると見られる。冷泉家系統本第一類の為秀若年のころの筆になる②河野美術館本の奥書「以相伝秘本具書写校合記」「相伝秘本」ではあったが、為家筆本とは認識していない」と、独自異文の多い極めて特異なその本文のありようを根拠に臆測すれば、「詠歌一体」の原本は、著者を明示して著述された、今日いうところの純然たる為家の歌論書ではなく、主として為家の口伝の累積ではあっても、他筆も多く混じり、中に為氏の関与した部分もなくはなかった体の「相伝秘本」であったと推察される。為家筆のみで全体が書き留められた著作物ではなかったと見なければならぬ。このことについては、なお冷泉家系統本の分析を通して追究しなければならぬ。

この為氏奥書本は、時代の新しい②本の他には後にとりあげる④為広筆本の奥書にみえるのみで、広く流布することとはなかったらしい。おそらくは為秀の時代、冷泉家において家の証本を校訂確立する際に参酌し（後に詳述する）、「詠歌一体」を冷泉家本の書名として採用して以後、二条家が「詠歌一体」の書名を標榜することはなかったこと、また右の本文異同箇所のうち②③⑤⑩⑫についてみれば、二条家系統本の二類ないし三類から訛伝しはじめ、一類①為

氏本の本文は冷泉家系統本に受け継がれ残っていることを主として勘案すれば、為氏本はおそらく冷泉家の秘庫に隠匿されて、外部に出ることはなかったのではあるまいか。

二条家側では、書名を持たない為家の口伝（為氏奥書本を基本とし若干訛伝した本文）が流布していたと思われる。

二条家系統本、第二類は、すべて③北海道大学図書館本の錯簡を承ける。本文は為氏本に最も近いけれども、大きな脱落もあり、為氏本そのものではない一本（書名もなかったであろう）を承け、「三賢秘訣 為家作」の書名が付されたと見られる。為氏本と同じく、④「思両人恋」の例歌は「いつかたも」一首のみ、⑨「近代よき歌と申合ひたる歌とも」の例歌四首目の「旅人の」の一首はなく、⑭「主ある詞」も基本的に為氏本と同じである（若干順序を異にする）。「三賢秘訣」固有の奥書はなく、書名の下に「為家作」とあるのは、すでに不分明となっていた作者を注しておく必要があったからであろう。その「三賢」とは、俊成・定家・為家を意味せしめていると思われ、「御子左家三代の蓄積した和歌の秘訣」の謂いであるにちがいない。

③本には、次の書写奥書がある。

于時正長貳年二月中旬之候、為初学／稽古、常住院殿

以御本書写之畢、／悪筆可恥之

右筆 春能

寛正二年五月十日

法橋実勝

本文と第一奥書までが一筆と見えることから、正長二年（一二四二）右筆春能が書写した本に、寛正二年（一二四六）に実勝が年月日を別筆で書記した本であろう。「常住院殿」は不明。④書陵部本⑤大和文華館本にも同じ奥書があり、③本の錯簡を丁替わりでない箇所そのまま連続して書写し、弥縫の手直しを加えている。

二条家系統本、第三類の⑦天理図書館本⑧桑原文庫本は、近世中期から後期の写本で、基本的には為氏本系の一本（やはり書名はなかったか）を承け、④「思両人恋」の例歌は「いつかたも」一首のみ、⑨「近代よき歌と申合ひたる歌とも」の例歌四首目の「旅人の」の一首はなく、⑭「主ある詞」も基本的に為氏本のものである。本文は二類本よりもさらに為氏本から遠ざかっていると見え、「主ある詞」の表示も、春・夏・秋・冬・恋・旅に部類して、歌一首（作者名も）の中で表示する方式に移行途中にある点において特異で（詞の欠脱もある）、直接第四類に接続してゆくことはない。また⑦⑧本ともに本書「八雲口伝」に固有の奥書はない。⑦本は、「詠歌大概」「和歌口伝（近代秀歌）」「下

官集（抜粹）などを後付合綴して、その末尾に全体にかかる次の書写奥書がある。

寛文四曆辰卯月二十日書写畢／我足軒 在判

正徳四曆午卯月二十六日書写畢／藤原宗眞

筆跡から正徳四年（一七一四）の写本と知れる。今は残っていないけれども、「主ある詞」の表示が四五語の詞を部類して列記する一段階前の方式をとり、「八雲口伝」の書名を冠し、本文細部は次の四類本に近似する一本があつて、それを基にして第四類本は成立したのであろう。

この第三類本では、書名が「八雲口伝」とされたことが重要で、以後これが二条家系統本の書名として定着する。

「八雲口伝」の意味するところは、「三賢」よりもさらに広く、「八雲の道の口伝」「和歌の道の口伝」の意であるにちがひなく、何人の命名になるかは不明ながら、二条流の誰かによる命名ではあろう。冷泉流に対抗する意識もあつたか。後付「詠歌大概」の奥に、「此集物も民部卿入道為家作云々」とあり、「和歌口伝（近代秀歌）」の奥に、「此集物京極中納言入道定家作也」とあるのは、作者のことにあまり明るくない人物の関与があつたことを思わせる。

二条家系統本の第四類は、為氏本系の本文を基本としな

がらも、冷泉家系統の本文が取り入れられて、混態の本文が形成されてゆく。

第四類第一種⑨尊經閣文庫本は、室町期の写本で、「八雲口伝 号詠歌一体」の書名を冠し、次の奥書をもつ。

弘長之比任先人之庭訓為後学之

遺鏡不顧老眼之不堪雨中記之当家之

外莫出他家努々可秘之

桑門融覚 在判

為家が「弘長之比」に書き記した奥書があつたとは考え難いが、「当家」とは二条家を意味せしめているであろうから、二条流の何人かによつて偽装された奥書であるに相違ない。この奥書を付したことは冷泉流への対抗姿勢の現れであらうし、書名の「号詠歌一体」は、世上に流布する冷泉家系統本の書名を無視できず取り入れたことの表示であるにちがひない。④「等思両人恋」の例歌は、「いつかたも」の歌と冷泉家系統本の「津の国の」の歌を、「是は平懷にみぐるしき也」で繋ぐことなく（繋げば二条家本文を否定し冷泉家本を優位に位置せしめることになる）、対等に並記する方式をとりはじめ、⑪「かさね詞の事」の例歌一首目に「けふかともあすともしらぬ白菊のしらざいくよをふべき我が身ぞ」が加わってくる。⑨本の「主ある詞」は、なお

四五語で、二条家系統本の数のままである。

第二種⑩青山文庫本には奥書はないが、「主ある詞」として冷泉家系統本に固有の「あやめぞかほる」「雨の夕くれ」「月やをしまの」「雪の夕くれ」の四語が追加されて、混態の度合いが一段と増大し、第五類に連続してゆく。

二条家系統本第五類の写本・板本には、⑨本奥書の最後の部分が「当家之外而他家努々可秘之」と若干訛伝し、署名の「桑門」が消えて「融覚判」のみとなる。また「主ある詞」は、「春」「夏」以下の部類名がなくなつて詞を列記するのみの方式となり、本文細部の訛伝も増加してゆく。

写本⑪細川文庫本⑫書陵部本⑬天理図書館本は、天正十九年（一五五〇）十二月四日に細川幽斎が編んだ「和歌秘抄（六部抄）」の一部をなすもので、この系統の写本が頗る多く伝存する。叢書全体の奥書が『近來風体抄』の末尾に、

右和歌秘抄随一覽連々加書写

今作一帖於座右為披見也敢不可

出窓外耳矣

天正十九曆蜡月初四／玄旨（花押）

と記されており、「和歌秘抄」の叢書名で、『近代秀歌』『正風体抄』『毎月抄』『八雲口伝』『夜の鶴』『近來風体抄』の

六部の著作が、細川幽斎によつて集成されたことを知る。

なお⑪本には右の幽斎奥書の後に、「右一冊幽斎以自筆本令書写之／慶長六年正月十六日 実顕／一校畢」とある（慶長六年は一六〇二年）^⑬。

刊年は確かめられないが、⑦板本「和歌六部抄」の末尾にも同じ天正十九年の奥書が付されており、「主ある詞」は部類分けせずに列記するのみの書式で、「われても末に」「身をこからしの」「袖さへなみの」の一行分三語を脱している。⑬の写本（同じ函架番号で二部架蔵される内の大きい方、渋引き表紙で、幽斎の花押似書きのある一冊）は、行数・各行の字詰めまで全く同じであることから、この本が板本「和歌六部抄」「八雲口伝」^{号詠歌二体}の底本とされたことは確実である。さらに「和歌六部抄」の全体についてみて、天理本「和歌秘抄」と完全に一致するので、これが板本の底本であると断定できる。「和歌六部抄」板本「八雲口伝」は、無界の板心に「六部抄中 一ヨリ〇廿二」〈「六部抄中終 〇四六」とある。

⑭元禄十五年（一七〇二）刊本「和歌古語深秘抄」の『八雲口伝』^{号詠歌二体}も、六部抄本と全く同じ板下が使用されている。

⑮書陵部本は、『八雲口伝』融覚奥書の後に、

右写本之通写置重而合他本可校合者也

元禄十三年庚辰重陽日 春山樵夫 判

為家卿作三賢秘訣之号重此事歟猶可尋

此秘書中津川先生より借用写置者也

明和元年甲申陽月日

とあり、この本の内容と⑩元禄九年（二六九六）の刊本とはきわめて近い関係にある（板本からの写しではない）。その⑩刊本『八雲口伝号詠歌体』は、⑪⑫の「和歌六部抄」「和歌古語深秘抄」両叢書板本とは異なる板で、「主ある詞」の内、「空さへ匂ふ」「空さへかけて」の順になっていることなど小さな相違がかなりある。同じ幽斎編叢書「和歌秘抄」の系統下にあることは疑いないものの、やや異なった位置にあると見える。この元禄九年の単行本と二つの叢書所収本が、近世期を通じて広く流布することになったのであった。

第五類の写本・板本の特徴は、①「重ね句の事」の例歌「今日かともあすともしらぬ白菊のしらすいくよをふへき我身そ」の下句が「しらす我身はいくよふへきそ」となっていること、②「歌のことは事」のいわゆる「主ある詞」が、二条家系統本固有の四十五語の上に冷泉家系統本にしかない四語もすべて取り入れて、全部で四十九語からなっ

ていること、そして列記の仕方に二種類（詞のグループ別けを残すものと、全てを列記するもの）の別はあっても、それらの語を部類分けすることなく列記していること、の三点に顕著である。

ちなみに『近來風体抄』（一三八七年成立）所引の「主ある詞」は、「詠歌・一体にしろせり」「以上詠歌・一体にあり」とあるとおり、冷泉家系統本「詠歌・一体」の本文にほぼ一致する（四三語）が、「乱れてなびく」（冷「絶え間になびく」）「われても末に（冷「われて末にも」）「我のみけたぬ」（冷「我が身にけたぬ」）の形は二条家系統の本文であり、ごく些細な部分において混態が生じはじめている。二条良基と冷泉為秀の生きた時代は重なり、直接の交渉もあったが、為秀の没（一三七二年）後間もない頃のことであった。

二条家系統第六類⑨の歴史民族博物館蔵高松宮本『八雲口伝号詠歌体』は、第五類の本文であるにも関わらず、「歌の詞の事」が丙本の形（部類分けがあつて、詞と作者ならびに歌一首を掲げる）で、後統の文は広本のもので「させる詮にてもなき詞のゆへなり」まで。そして「古歌を取る事」以下がなく、代わりに「二不可好詠詞但用捨之事」と「粟田口大納言基良卿被注送草云」が付加された、広本（甲

本」と略本（丙本）の混合本とでも言うべき不思議な内容の本で、しかも次の奥書を持つ。

以曾祖父卿自筆本令写校合畢、尤可為証本矣

左兵衛督為秀 判

文明第十一曆林鐘下旬之候、於周防勝音寺閑窓令

書写而已

右相府 在判

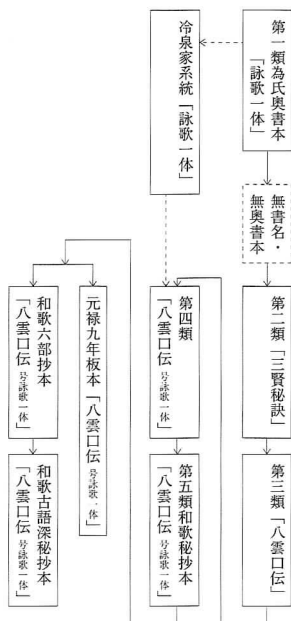
延徳三年五月十四日書写之

堯淵 在判

為秀の左兵衛督は、延文元年（一三五六）正月二十八日から延文四年（一三五九）正月二十六日まで。右相府は三条公敦（一四三九—一五〇七。実量の子、従一位右大臣）で、文明十一年（一四七九）四月に周防に下向、大内政弘や被官と交流した人物。堯淵は、生没年未詳。下冷泉政為の子で、天文二年（一五三三）周防に下り山口に滞在した。「左兵衛督為秀」の奥書は冷泉家系統本にも見えず、これのみである点も不審で、為秀が為家を「曾祖父卿」というはずもなく、このことも不審である。しかし、下冷泉家の者が関わっていることが注目され、地方における流布の一斑を窺うことはできる。これは板本の成立とは無関係の特殊な孤立した一本と位置づけられる。

以上、元禄年間の三種類の板本成立に至るまでの、二条

家系統諸本と成立について概説してきたが、いまそれを概念図として示すと以下のとおりである。



注

- (1) ①佐藤恒雄「詠歌一体考」(『言語と文芸』第四十号、昭和四十年五月)。福田秀一・佐藤恒雄「詠歌一体」校注・解説(中世の文学『歌論集(二)』昭和四十六年二月、三弥井書店)。②佐藤恒雄「詠歌一体 解説」(徳川黎明会叢書『桐火桶・詠歌一体・綺語抄』平成元年七月、思文閣出版)。
- (2) 佐藤恒雄「詠歌一体 解題」(冷泉家時雨亭叢書第六卷『続後撰和歌集 為家歌学』平成六年二月、朝日新聞社)。
- (3) 錦仁・小林一彦「冷泉為秀筆 詠歌一体」(平成十三年十月、和泉書院)。
- (3) 第一類②本は、為氏奥書のあとに、前置する『和歌聞書』

と併せた奥書を、一丁九行の野紙に次のとおり記す。

此両冊、東本願寺光勝大僧正所持請一覽、此^{（一冊）}八^{（二冊）}懇

切にて有益事共也、深可味者、當時にも有用也、初^{（一冊）}一^{（二冊）}

ハ、愚眼浅学にて不審之事有歟之旨答、返却畢、

以愚筆写之畢

安政三年五月

花押

安政三年（一八五六）の書写本で、①本を忠実に書写して
いる。

（4）④本には、さらに次の奥書がある。

右以羽林博意朝臣（東久世殿）御本写之、／併令一校

源博意は、天和三年（一六八三）正月五日叙従四位上（二

十五歳）、元禄元年（一六八八）二月二十九日（三十歳）任

右中将、元禄三年（一六九〇）四月一日（三十三歳）博高と

改名しているから、天和三年以降元禄三年四月以前の間の

書写本である。

（5）④書陵部本⑤書陵部本も同系の本文であるが、④本は

「八雲口伝」「愚問賢註」「近來風体」の三本を合綴し、それ
ぞれの奥書の末尾に、以下のごとくある。

慶長五年九月自妙庵伝領之／内也

也足叟素然（花押似書）

寛永第十五歳五月十三日肖柏目筆本不慮

実覽之間一校了（但件本有欠字欠行所々の落字等在之

也） 特進並相通村

慶長五年（一六〇〇）の中院通勝筆本に、寛永十五年（一

六三八）嗣子通村が肖柏筆本によつて校合を加えた本とい

う素性がたどれるが、校合のあり様をみると「近來風体」

のみの奥書であるらしい。全体の奥には「烏丸家本ヲ以て令

写之／甲寅仲秋（花押）」とある。花押の主は特定できない

が、筆跡や本の形態などから、「甲寅」は延宝二年（一六七

四）であろう。

（本学教授）